

をアセンションと関連づけ、今後とも起きると示唆、震災後も地震関連の発言がある。以上の条件で絞り込んだところ五人のブログを拾うことができた。アセンションを肯定的にとらえている者は二人、距離をとりつつ大震災を予知した者が一人、懐疑的だが個人的アセンションを期待している者が一人、アセンションは人口削減のための陰謀だとする者が一人だった。さらに、震災後、同じ検索語でヒット数が多い三月一二日からの四日間を期間指定して適合度順上位から有意意味なブログを十個拾い、事例の少なさを補った。肯定派は六、前提とするが違和感を表明している者が三、陰謀論の立場からの否定派が一だった。どちらの検索でもアセンションを前提としつつ違和感を表明する者が一定数いる。

肯定派には四つの特徴がある。1 天罰の否定。アセンションは地球の進化であり、震災の背後に超自然的主体の意志は認められない。2 善悪二元論の否定とネガポジ二元論。震災後の世間は互いを非難しあうネガティブな想念が渦巻いているが、自分分は世界がよい方向に向かっているとポジティブに見ている。死後生を信じているので、震災による死亡は罰と見なさない。3 潜在化・個人化。以上のような信念をネット以外の日常生活では話さない。4 日本の特別視。震災を機に日本人の絆が強まり世界から賞賛されている。アセンションは日本から始まった。「がんばれニッポン」という世俗的スローガンと接続することで、災害の宗教的意味づけを警戒する「復興世俗主義」への適応が可能となっている。

復興世俗主義は、地域復興支援のための国民的連帯に価値を

置くが、心のケアを妨げる表現の抑制という観点から、災害の超自然的原因を求めることに否定的で、むしろ人的責任を追及する。この批判的態度をアセンション信奉者はネガティブな状態とする。彼らは「地球」や「日本」を抽象的に意識するが、被災者への共感の薄く、自己のポジティブさに固執する個人主義者である。それに対して、アセンションに違和感を持つスピリチュアルな人々は、地球や日本よりも日常生活の正常化に関心を寄せる私生活主義者である。

多中心的でカリスマも組織も持たず、個人のポジティブな心理状態に固執するアセンション信奉者の傾向は、終末論の個人化・心理化を示唆している。他方、個人的スピリチュアリティの潮流において、世界の破滅の想定や論争的雰囲気は一般的ではない。暴力的なカルト団体が楽天的な終末論と個人主義的な集まりから始まった例もあることを想起すれば、一部のアセンション思想家から逸脱的組織が発生する可能性も否めない。

近代化・世俗化・宗教

——危機の時代からの再考察——

中野 毅

一 近年、政教分離、国家・政治と宗教、近代化と世俗化に関する議論が、政治学や国際社会論などの領域において、「宗教」を重要なファクターとして取り入れて盛んになっている。

昨年はイスラエルの政治学者 Jonathan Fox の統計学的(計

量的質的) 調査を紹介した(Fox 2008)が、今回は哲学の分野で話題になっているチャールズ・テイラー(Charles Taylor)の説を紹介しつつ、三・一一東日本大震災と福島原発事故により発生した大規模な社会的危機に宗教はいかなる役割を果たしているのか、そして宗教学は何をなすべきなのかという問題意識を繰り込みながら、考えていく。

二 テイラーは、近代は世俗的な時代であるという。テイラーにとって重要な近代的原理は、脱呪術化の長い道程の果てに、超越的な権威、高次元の時間などに依拠しない、現世的で内在的な枠組み(immanent frame, Taylor, 2007, chap. 15)によって現代世界は成り立っていると、多くの人々が想像する段階へと至り着いたとする点である。神や来世に依拠して組み立てられるような社会は、もはや終わった。社会的政治的な生はもっぱら世俗的な時間(secular time)の中でとらえられ、俗なる時間(profane time)の中における人々の共同行為とみなされるようになった。政教分離や世俗化などと論じられる問題の背後にある本質的な意味は、こうしたものである。

とはいえ、神の意志がわれわれ個人の中に現前する可能性はあり、特定の個人や集団のアイデンティティー形成に中心的な位置を占めることはある。つまり、あらゆる社会的な行為が俗なる時間のなかで生じているという感覚に合致するようななかたちで、宗教が存在するようになったとテイラーは結論づけている。世俗的時代であっても宗教の不在や不要ということではない。宗教の立ち位置、宗教の存在様式が変化したととらえるのである。

二〇〇二年の『ジェイムズ再訪』では、以下の三段階で整理している。①Paleo-Durkheimian clericalism: 前近代、②Neo-Durkheimian: 近代前期、③Post-Durkheimian, non-Durkheimian dispensation: 近代後期。この区分も有益である。

三 多くの国民は三月十一日に東日本をおそった大震災や福島原発事故を「神の怒り」「仏罰」「宿業」などと考えてはいない。われわれは巨大地震発生の自然的メカニズムを知っており、原爆の悲惨とともに原発の制御不能な危険性も知った。この宇宙の誕生から人類としての進化過程も解明されてきた。病気を引き起こす遺伝子的メカニズムも分かってきた。そして、それらが招く災害や被害への対策・対処も、経験科学的な知識と技術によってのみ可能である。祈りや呪術では解決できないことを知っている。まさにテイラーのいう世俗的な時間や空間(immanent frame)において考えており、そして世界の様々な地域での出来事が同じ時間や空間で生起していると想像しているし、できる。

それは欧米のみでなく、日本や中国でも、そしてイスラム圏でも宗教的帰属と国家体制とが切り離されつつあり、現代世界は世俗化された世界となってきた。しかし、その世界にあって、人々は自由な選択と、自分にとって意味あると感じる、さまざまな宗教的活動を行う。今回の大災害においても、多くの宗教者、宗教団体が活発な支援活動を展開した。しかしその活動も他のヴォランティア団体や自治体などの活動と質的に同じものであり、特殊宗教的な要素は一部を除いて省かざるを得な

いことも多い。

現代世界は宗教的、非宗教的なものの質的な差異がなくなる世界になってきた。宗教およびその集団も、テイラーのいう *immanent* な枠組みに合致する感覚が元になっていく必要がある。宗教は世俗化された世界における *enclave* の一つとなっていくのだろうか。

パールシー社会におけるナオジョテの意義

香月法子

現代インドのゾロアスター教徒、パールシーにおける入信式ナオジョテは、儀礼前の浄め、聖職者による入信者への聖なるシャツのストドラと聖帯クステイの授与、そして続く信仰告白、祝福の祈禱、及び儀礼後の会食によって構成されている。この一連の儀礼によってゾロアスター教のエッセンスが学べるようになっていいる。特に聖職者と入信者が共にクステイを結ぶ所作は、クステイの構造とクステイの祈りそれぞれの意味と結びつき、無駄がなく完成されている。またナオジョテには家族、親戚に限らず友人、知人も参加し、パールシー・コミュニティで共に祝うため、参加者は一般的に百人以上、中には五百人以上という場合もある。このように現代のナオジョテは、ゾロアスター教徒となると同時に、彼らのコミュニティの成員として受け入れられるための儀礼でもあるといえる。

ナオジョテはどのように成立したのか。まず聖紐とはゾロア

スター以前のアーリア人にとって、アーリア人の、また彼らが形成するコミュニティの成人男子の証として授けられるものであったこと、そしてゾロアスターが、これを男女共通のゾロアスター教徒の証として採用したのだろうということである。また教徒となるにあたって重要な信仰告白は、ササン朝以前には見られず、確立されたのもササン朝後期以後とされている。さらにパールシーの間でナオジョテという言葉が、平信徒の入信式を指すようになったのは十五世紀頃とされている。ササン朝滅亡後、ゾロアスター教徒に関する歴史的証言は少なく、ナオジョテの成立過程にも分からない点が多い。しかし上述のような研究成果を鑑みれば、ゾロアスター教の必須儀礼ともいえるナオジョテは、ゾロアスター教最盛期ではなく、ササン朝衰退期からその後の混乱期にかけて発展し、現在のような形に確立されたと考えられる。つまり単に入信式というだけでなく、ゾロアスター教への信仰心が揺らぐ不安定な時代の中で、ゾロアスター教を絶やさず存続させるという使命感が、ナオジョテを発展させたと考えられる。

現代パールシーにとって、パールシーに生まれたからには、ナオジョテを受けないなどということは考えられないことである。そして現在、このナオジョテを巡って世界中のパールシーは激しい論争をしている。それはゾロアスター教徒を巡る定義に関わっている。これまでのところパールシーは、この定義について統一見解を出したりすることができずにいる。それ故、彼らは、パールシー・コミュニティ内だけにナオジョテを受ける資格を与えようとするグループと、コミュニティ外にもそれ